

草庵仏教

第225号
(発行日)

2009年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と

12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

親子の縁に思う

私には孫が四人いる。孫が

生まれた時には、病院へ生ま

れた赤ちゃんに会いに行く。

生まれたての赤ちゃんを見る

といつても「あんたはどこか

ら来たのか」と問いたくなる。

可愛いのもさることながら、

不思議さと不可解さを直感的

に感じるからである。

また、両親を始め親族縁者

の葬式後、火葬場で茶毘たびにふ

し、しばらくしてお骨を拾い

に行く。火葬場の釜の中から、

焼け残った骨と灰が出てく

る。それを見た時いつでも「あ

んたはどこへ行ったのか」と

問わずにはおれない。不可解

な謎に襲われるのである。

誕生と死に際して、おそら

く多くの人が大なり小なり私

と同じ感じをいただくのではな

かろうか。

誕生の時の不思議さ・不可

解さは、時が立つ中で忘れ去

られていく。そうして生まれ

た子供に対して「私の子」と

思い、〈私の所属物〉のよう

にさえ思ってしまう。

だから子供に先立たれる

と、自分の最愛の宝が奪い去

られたように嘆き悲しむので

はなかるうか。

しかしながら、人の誕生の

時と死ぬ時のことから考える

と、〈私の子〉(子は私のもの)

という考えが正しい道理に即

したものであるとは思えない

のである。

それについて、釈尊のお弟

子にパターチャーラー尼とい

う勝れた尼僧(比丘尼)さん

がいた。『テーリーガータ』

という經典にパターチャーラ

ー尼の言葉が出てくる。それ

には

「その子が来たりまた去って

行った道をそなたは知らず、

またその子がどこから来たの

かも知らないのに、『我が

子!』といって、そなたは泣

き悲しむ。

請こわれぬのに、かれ(子)

は、そこからやって来た。ま

た許しをえないのに、かれは、

ここから去って行った。

かれは、ここから、一つの

道を通ってやって来た。かれ

はそこから、他の一つの道を

通って行くであろう。人間の

かたちをとって死んで、輪廻りんね

しつつ過ぎ去るであろう。来

たときのようなすがたで、去

って行った。そこに何の悲歎

をする必要があるうか。」

という。

この教説では、我が子とい

うものも、それはどこからか

この世に生まれ来て、人間の

形を取り、そしてしばらくこ

の世にいて、やがて人間の形

を離れ、この世から去ってい

く。生まれて死ぬまでの間、

人の形を取り、縁があつて親

となり子となったのである。

にもかかわらず、子供は自分

が生み、自分が作って、あた

かも自分のもののように思

い、子が亡くなると「我が

子!」といって嘆き悲しむの

である、教えられるよ

うである。

誕生時や死亡時のあの不可

解さ、不思議さに思いをいた

すと、このパターチャーラー

尼の言葉に深くうなずかず

はおれない。

親も子も、共にそれぞれの

道を通ってこの世にやってき

た。そして親子の因縁を結ん

で、この世を生き、やがて人

間の形を離れてそれぞれの道

を通ってこの世を去ってい

く。なるほど、と思う。そう

すると、「我が子が死んだ」

といつて、自分のもち物を奪

われたように嘆き悲しむの

は、凡情であつて、智慧ある

者の態度ではなかるう。

ただそういう凡情を離れら

れないのが凡夫としての私た

ちであること、それは紛れも

ない事実である。

そういう凡情に生きるしか

ない私たちにこそお念仏の教

えがあるのであるう。

(了)

《 春季彼岸永代経法要 》

三月二十二日

午後二時始

地獄極楽はあるのか

と教えられている。

最近、ある方から「地獄・

極楽はあるかないか」という質問を受けた。この問いは今に始まったことではなくて、ずっと以前から出され続けてきた問いであるが、真宗門徒としてこの問題をどう了解すればいいか、この点について易しく述べてみたい。

まず、地獄とは迷いの心、とくに瞋恚の心が生み出した苦しみの境界といわれている。だから迷いが無くなり、瞋恚の煩惱が無くなると、地獄はおのずから無くなる。そういう意味では地獄は迷妄の意識が作り出した状況ないしは境界といえよう。

一方、極楽は浄土ともいわれ仏国ともいわれて、仏の悟りの智慧によって感得される純粹で清浄な領域であろう。これは我々の迷妄の意識が作り上げた世界ではなくて、本来ありのままの領域であって、「いのちはかりなく、智慧はかりなく、慈悲はかりなく、まったき安らかな境界」

世親菩薩の『浄土論』には「かの世界（浄土）の相を觀ずるに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとく、広大にして辺際なし。」

と説かれている。浄土は、欲界・色界・無色界という迷いの境界（三界）を超越した世界であり、広大で辺ほとりがない。つまりどこどこまでも浄土ならざるはなし、と仰せになっている。浄土は、ここまですべていう辺際いわずに境界がないのである。

であれば今の私たちの人間界も浄土の中にあるといっている。いいし、地獄界も浄土の中にあるといえよう。

はかりなき浄土の世界の中にありながら、衆生は迷いの境界、苦しみの境界を自らの妄念によって作り出している。ちようど、太陽がさんさんと照つていながら、戸を閉めて真つ暗な小屋を作つて、その中に閉じこもっているようなのが地獄などの迷いの境界といえよう。

そういう意味で、地獄（瞋

恚によって苦しむ境界）・餓鬼（食欲によって苦しむ境界）

・畜生（愚かさによって苦しむ境界）は衆生の業煩惱の意識が虚構した世界であろう。

それに比して、浄土は本来ある清浄な領域であろう。

世界とか境界というものは、それを感知する意識（心）を離れては存在しない。

たとえば、私たちの人間世界（知られている世界）は人間の意識（知る心）を離れては存在しない。

石や木には意識があるとは思えないので、石や木には世界は存在しないのではなからうか。

「庭に花が咲いている」ということとそれを感知している心とは離すことができない。見る用き（心）と見られるものとは切り離せない。心（意識）が無ければ世界は無いといっている。

「いや、あなたが死んでも世界はありますよ」と他の人が言つても、そう言っている人にも心があるから「世界がある」といえるのである。だ

れにも心がなかったら、世界は有るも無いもないではないか。

世界があるということとそれを認識する心とは分けることの出来ない一つの事なのである。

そして（人間の心）に応じて（人間の世界）があるのであろう。猫の心になれば、人間が見ているような世界とはおそらく違った（猫の世界）を猫は感じて生きているのではなからうか。

海にいる魚は海を住まいのようには感じているのであろう。人間は海中を住まいのようには感じられない。魚には魚の世界があるのであって、それは人間には想像出来ないが、少なくとも人間の感じているこの世界とは違って感じているといえよう。

フクロウの見ている世界は色のない世界である。なぜならフクロウの目は色盲だからである。

人間世界は、人間の目や耳や鼻や皮膚の感覚器官を通して感知している世界なのである。

感覚器官が違つて世界も違つて感じるのであろう。この

ように生きものの生態からも、世界は意識と離れないことが分かる。

さて、凡夫の心において感知されている世界を仏教では娑婆世界という。その凡夫の心は純粹無漏ではなくて、我欲を中心とする煩惱によって汚染された心である。「我有り、我が物有り」というように、我を中心において物を見ているのであり、世界を感知している。我執我愛の心が根になって世界を感じている。

だから世界をありのままに感知しているのではなくて、自己中心的にゆがめて認識している。

たとえていうと、色眼鏡を掛けて世界を見ているようなものである。

赤いレンズの眼鏡を掛けて見ると世界が赤く見え、青いレンズの眼鏡を掛けて世界を見ると世界は青く見える。そのように私たちは煩惱に染まった心の眼で世界を見ている。だからそれはありのままを見ているのではなくて、色づけられた世界を見ているのである。

もし瞋恚の心が盛んな意識

で世界を感じると世界は地獄道の様相を帯びて感じられるのである。食欲の心が一杯になるとそれに応じて世界は餓鬼道の状況を呈してこよう。

自己批判の心が無く、悪いことをしても恥じない意識状況になると畜生道の世界が現出してこよう。

そういう意味から言うと、地獄・餓鬼・畜生の三悪道は死後だけに限らず、この世にもあり得よう。そして、死んでも食欲・瞋恚・愚痴の業煩惱が深ければ、三悪道が現出してくると言えよう。

そういう様に、私たちは世界を心（意識）を通して、見たり、聞いたり、触れたりして感知している。そして、この心が煩惱に汚染されているので、私たちの意識には純粋な清らかな境界（浄土）は感得できないのであろう。

たとえていえば、うっとりとした雨の日に空港から飛行機に乗って飛び立つと、飛行機は上昇して雲を突き抜ける。そうすると、雲の下は雨が降っていてうっとりしいが、いったん雲を突き抜けると非常に青い空が果てしなく広がっ

ている。下界は雲に覆われて暗くうっとりしいが、雲を突き抜けると真つ青な大空が現れる。

そのように、迷いの雲が私たちの心を覆っているから、その心に感じる世界はうっとりしくて汚い娑婆世界である。しかし、迷いの心が破れて、煩惱を突き破ると、清らかな光明の世界が感得されるのであろう。それが浄土であり極楽世界であらう。浄土こそ本来ある世界であり、娑婆は煩惱妄念によって虚構された世界である。それゆえ、娑婆世界という実体はない。

『維摩経』の「仏国品」には、世尊（釈迦）がシャーリプトラ（舍利弗）に「シャーリプトラよ、次のことをどう考えるか。日や月は不浄なのか。（そうでは無いであろう。）それならばどうして盲者には見えないのか」。お答えする、「世尊よ、そうではありません。それは盲者の過失であつても、日や月に過失があるのではありません。」

には、如来の仏国土が功徳をもつて飾られていることが見えぬ。それは彼らの無知からする過失ではあつても、そこに如来の側に過失があるのではない。シャーリプッタよ、如来の仏国土は清浄であるにもかかわらず、おまえがそれを見ないのである。」

と、ある。浄土は無智ゆえに凡夫には見えない。それはあたかも盲人が外の明るい世界を見るのが出来ないようなものだと言われている。

このような極楽世界がましますということは私ども煩惱具足の凡夫に知れようはずはない。だから「極楽があるかどうか」をいくら煩惱の心で探しても、極楽を感得し、認識する心が私たちに無い限り、極楽は確かめようはない。

「仏、長老舍利弗に告げたまわく、これより西方に、十億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極楽と曰う。その土に仏まします、阿弥陀と号す。」

と説かれている。仏でないで、「極楽あり」とは説けないであろう。（西方とは、衆生の死して帰する方角を示すイメージ言語である。また「過ぎ」とは超過ということである。）

だから、誰かが「本当に極楽があるかどうか」ともし私に質問されたならば、「私のような煩惱の深い凡夫には到底、極楽があるかどうか分かるわけがありません。しかしながら、悟りをお開きになつたお釈迦様が、極楽があると仰せ下さっているのですから、私は極楽がましますと信じさせていたいています。

釈迦様のお言葉の通りに受けとらせていただいておりますので、極楽がましますといただいています。」

また「では地獄はあるのでしょうか」

「これもお釈迦様がお説きになつているので、それをまことと信じているのです。ただ地獄は同じ迷いの境界ですから、少しは地獄の世界を感じます。なぜなら、私どもは罪が深いから、当然の報いとして苦しみを受けるであります。そうすると罪の報いとしての苦の世界である地獄や餓鬼や畜生の領域が説かれるのは当然でありましょう。」

とお答えしよう。お釈迦様の教説をお聞きし、地獄や餓鬼や畜生の世界は、衆生の罪の報いによって往くべき未来の境涯として教えられている。

私の人生を深く反省すると、自分のやってきたことは果たして、他者の幸せを念じながら清らかな生活をしてきたかどうか。

自分と自分の家族のために汲々として、利害損得にこだわったり、人をほめることよりも悪口を言うことが多く、

「オレがオレが」と自我を主張し、しかも毎日魚や肉を食べて、その死骸によって肉体を維持してきた。他者や世界の幸せのためにどれほどの行いをしてきたか、などなど反省すると、私の行く末は餓鬼や畜生、あるいは地獄のような苦の世界ではないかと感ぜしめられる。

現今は親殺しがしばしば行われる。親殺しの罪の報いは地獄であると説かれている。ところが重罪を犯した当の本人は、しばしば「死刑になっても死んだら終わりでなくなるんや」という。

人を二人も三人も殺したり、親を殺した人が、その罪の報いはなくて、極悪の罪は死んだらご破算になっておしまになるのであろうか。

善いことをしても悪いことをしても、その報いはないのであろうか。死んだら地獄も餓鬼も畜生の世界もなく、消えて差し引きゼロになるのであろうか。

釈迦仏は、因果応報を説かれた、罪を為せば必ずそれに応じた苦を受け、善を為せばそれに応じた楽を得るとお説きになった。

そうすれば、この世での善悪の行いは、死後にもその結果としての苦楽が報われてくるのは道理であらう。死んだら、報いも何もない、親殺しの罪もチャラになるといふ今日の考えには、同感できない。

繰り返すと、「あなたが見たり聴いたり感じたりしている世界は、あなたの煩惱妄念を通して受けとっている世界ではない」ということである。そして、地獄も極楽も、真実を覚ったお方、すなわち釈迦仏から教えていただくのである。私も凡夫と仏様とは境界が五十二段のレベルの差があるといわれている。浄土を感得されたお方なればこそ、地獄や餓鬼などの苦しみの世界も知りたもうのである。

私も悟りの世界も知らない、迷いの世界も知らない。夏の蟬は、冬を知らないばかりか、自分が夏にいることさえ知らない。なぜなら冬を知っているものが初めて夏を夏と知ることができる。夢を見ている人は、覚めた世界を知らないばかりか、夢の中にいることも知らない。

浄土を知らない人は地獄も餓鬼も畜生の世界も知らない。覚者（仏）に教えられて知るのである。

さらに付け加えると、「地獄も極楽も見たことがない、そんなものあるだろうか」と人はよく言う。そういう人にお尋ねするのだが、「そう言っているあなた自身をあなたは見たことがありますか」と。確かにあなたや私の、物質の塊である肉体は見る事ができる。しかし自分の主人公と

いつていい心そのものは誰も見たことはない。私も自分の心を見たことはない。見えているのはまとうている肉体だけである。心そのものは全く見えないけれども厳然として働いている。私が目で見たり触れたりできるものは物質の一部だけである。いわんや極楽や地獄が人間の目に見えないから「無いものだ」と決めるのは独断であらう。

「極楽はありますか、地獄はありますか」と自分自身に尋ねても勿論分からない、他者に聞いても分からない。凡夫である限り、学者や博士に聞いても分からない。

ただ真実を悟られた仏様にお聞きすればいい。仏様は仏説としてすでに、「極楽有り、地獄有り」とお説きになつて

いる。あとは、仏説を否定するか、それとも仏説に従うかだけである。

う無窮の闇ではないであろうか。へ人生の最後は虚無である」という、非常に空しい人

は簡単である。十才の子供でもできる。「地獄なんかあるものか、極楽なんかあるものか」と。ではそういう人に「ではあなたは死んで自分がどうなると思つているのですか」とお尋ねすると、「死んだらどうなるかわからない」「死んだら終わりや」「死んだら何も無くなる」程度の考えしか出てこない。非常に底の浅い人生観や世界観しか返ってこないのではないか。

こうした現代人にとって、死後は全くの虚無としか映らない。現代人の地獄とは、死後は（虚無）（不透明）とい

《念仏座談会のお休み》

四月十一日（念仏座談会）

は所用の為、休会します。